

ギャップおじさんTRPG  
ゲームブック風シナリオ



『三年目の浮気』

# ゲームブック風シナリオ『三年目の浮気』

## 【今回予告】

君達は世を忍び、その正体を隠して生きている。  
けれども、隠し事せずに済む友人というのもなくはない。  
精肉店とステーキハウスを営む、高木もその一人だ。  
今年で43歳になる主人は、三年前、20下の妻を娶ったばかりだ。  
だが、妻はそんな夫が、女子高生らしき少女と歩いているのを見かけたというのだ。

……さて、どうするか。

使用追加ルール：(シナリオ拠所・スキルルール)

シナリオ拠所：

高木みらい 23歳。

精肉店/ステーキハウス TAKAGI を経営している妻。

## 【レギュレーション】

シナリオタイプ：日常型シナリオ

PC 1人 シナリオ拠所+情報イベント 脅威ランク 2 闇 20

PC 2人 情報イベント 脅威ランク 2 闇 20

PC 3人 脅威ランク 3 闇 30

## 【シナリオ説明】

今回予告の通り、とある精肉店兼ステーキハウスを営む夫婦の浮気問題に関わるシナリオです。  
当然、魔法や人外や改造人間、古流や大物や特殊部隊といった超常の存在はこのシナリオでは登場しません。  
大げさなアクションや、世界を揺るがすような大事件、奇奇怪怪な出来事のような展開はありません。  
人の命や家庭の危機といった展開は、場合によってはありますが、ギャップおじさん感は薄いシナリオです。

また、このシナリオは、ゲームブック形式で記述されており、GMを必要としません。  
もし、GMを置いて遊ぶ場合は、記述されている台詞だけでは基本的に会話が成り立ちません。  
あらかじめ、シーンの全文を公開し、その前提でロールプレイを楽しむか、適宜変更して対応をお願いします。

なお、このシナリオをプレイした結果。  
場の空気が重くなった。なにか気まずい。これで闇落ちとかどうすればいいんだ。  
以上のような苦情は、残念ながら諦めてください。

## 【遊び方】

各シーンには →○○ページへ行く、と言う風に記述されています。  
そのシーンで書かれている判定や指示に従って、PDFのページを直接入力してジャンプするか、  
PDFのハイパーリンクからクリックでジャンプしてください。  
次のページが見えないよう、1枚ずつページを表示するように設定するのを忘れないでください。

それでは、ここまでの内容を確認したら、拠所フェイズへと移りましょう。

[→3ページへ行く。](#)

画像はジュエルセイバーFREEからお借りしています。

URL : <http://www.jewel-s.jp/>

## 【拠所フェイズ】

拠所フェイズではPCの自己紹介のあと、拠所判定を行う。  
その後、演出を下の6つから選び、そのページへ飛ぶこと。

1～6の場面から好きな番号を選択するか、ダイスでランダムに決めること。

[1：朝のゴミ捨て場 →4ページへ行く](#)

[2：お昼の精肉店TAKAGI →5ページへ行く](#)

[3：夕方休憩 →6ページへ行く](#)

[4：ステーキハウスTAKAGI →7ページへ行く](#)

[5：お酒の時間 →8ページへ行く](#)

[6：閉店間際 →9ページへ行く](#)



### 【1：朝のゴミ捨て場】

朝、ゴミを捨てに行くと、見知った顔と遭遇する。

みらい：

「あら、おはようございます。ずいぶんお早いですね？」

大きなゴミ袋を抱えていて、よほど重いのか額に汗をかいている。

みらい：

「あはは……お店ばかりで家のお掃除すっかりさぼっちゃってて」

少しがんばったらすごい量で、といたずらっぽく笑いながら言う。

みらい：

「ウチの人はもう、家のことぜんぜん手伝ってくれないんですよー」

愚痴っぽく言いながらもどこか楽しそうに見える。

まだ、拠点フェイズを行っていないPCがいるなら→3ページへ行く。

全員が拠点フェイズを終えているなら、休憩を10分取り雑談の時間を取った後、→10ページへ行く。



## 【2：お昼の精肉店TAKAGI】

お昼頃、精肉店TAKAGIに行くと、店番をしていたのは妻のみらいだった。

みらい：

「あら、こんにちは。お買い物ですか？」

コロコロと品の良い笑みを浮かべて挨拶をしてくれる。

みらい：

「すみません。主人は今出ていて……あ、そうだ」

そう言いながらみらいはトングを掴んで、紙袋にポイポイポイと何かを詰める。

みらい：

「はい、コロッケ。今ちょうど揚げたところなんですけど。……主人には内緒で、ね？」

いたずらっぽく君に、おまけをつけてくれた。

「ふふ、お客さんが来てくれてるのに、いないあの人が悪いんです」

まだ、抛所フェイズを行っていないPCがいるなら→3ページへ行く。

全員が抛所フェイズを終えているなら、休憩を10分取り雑談の時間を取った後、→10ページへ行く。



### 【3：夕方休憩】

夕暮れの商店街で、君は買い物袋を提げた女性と出くわした。

みらい：

「あー……えーと……こんばんは？ う～……まずいところ、見られちゃいました、かね……？」

彼女は昼は精肉店、夜はステーキハウスを営んでいるはずなのだが。

商店街にある、老舗の肉屋の紙包みが握られ、そこからコロッケらしきものが見えている。

みらい：

「ちがうんです。……あそこのコロッケ、美味しいんです」

言い訳しながらもコロッケを食べるのはやめないらしい。

みらい：

「……一個、いります？」

気まずげにコロッケを差し出すのは、口止め料か何かのつもりだろうか。

みらい：

「……どうぞ」

まだ、拠所フェイズを行っていないPCがいるなら→3ページへ行く。

全員が拠所フェイズを終えているなら、休憩を10分取り雑談の時間を取った後、→10ページへ行く。



#### 【4：ステーキハウスTAKAGI】

時間帯もよかったのだろうか。店内は人も少なく、煙の臭いもまださほどではない。店内に入ってきた君の姿に、彼女はパッと笑みを浮かべた。

みらい：

「いらっしゃいませ。今日はちょっと空いてますよー」

席に案内すると彼女はそのままたたきと厨房へと戻っていく。

みらい：

「注文はいつものでいいですか？ あ、お飲物すぐ持っていきますねー」

テキパキと店を回しながら、彼女は君に楽しげに話しかけた。

みらい：

「ふふ。いつもの、っていうの、実は言ってみたかったんですよ、私」

みらい：

「あ……もしかして、今日は違うのの気分でした？！」

まだ、拠所フェイズを行っていないPCがいるなら→3ページへ行く。

全員が拠所フェイズを終えているなら、休憩を10分取り雑談の時間を取った後、→10ページへ行く。



### 【5：お酒の時間】

精肉店直営の店だけあって、おつまみもなかなかイケるのがTAKAGIだ。

みらい：

「あ、今日はお酒ですか？ 何にしますか？」

少し残念そうにしながらも注文の品を用意する彼女。

みらい：

「はい、おまちどうさま」

お酒と一緒に、注文していない小鉢もあることに気づく。

みらい：

「ちょっと余らせちゃって。……よかったら、一緒に食べてもらえませんか？」

余りものという感じはしないのだが。

まだ、抛所フェイズを行っていないPCがいるなら→3ページへ行く。

全員が抛所フェイズを終えているなら、休憩を10分取り雑談の時間を取った後、→10ページへ行く。





## 【6：閉店間際】

君が店に入ると客もまばら。もう閉店間際のようなだった。

みらい：

「あら、今日はギリギリでしたね」

くすくすと愛想のいい笑みを浮かべながらメニューをくれると、君の横からいくつかの品を指差した。

みらい：

「これと、これは今日はもう売り切れちゃって。……それでも大丈夫です？」

確認してみると、君がいつも頼む品ではなかった。

みらい：

「そのぶん、ほかはちょっとおまけしますよ？」

閉店間際でもう少ししたら店じまいだというのに、そんなことをおくびにも出さない。

まだ、抛所フェイズを行っていないPCがいるなら→3ページへ行く。

全員が抛所フェイズを終えているなら、休憩を10分取り雑談の時間を取った後、→10ページへ行く。



## 【異音フェイズ：ステーキハウスTAKAGI】

夕方。

ステーキハウスTAKAGIに足を運ぶと、まだ準備中の看板がかかったままだった。定休日ではなかったはずだが、と首をひねっていると、他のメンツも君同様にやってきた。全員が揃ったところで、店のドアがゆっくりと開いた。

みらい：

「あ……すみません、ぼうっとしていて。今、開けますから」

店を開け、店内に通してくれるが様子がおかしい。

いつもならば笑みを絶やさない彼女が、今日はどうにも表情が暗い。普段、そそっかしくもあるがはつらつとした彼女の姿はどこにもない。君たちがため息の理由を尋ねると、彼女の目から涙がこぼれた。

みらい：

「……うちの人が、他の女の子と一緒にいるところを見てしまって」

なぜ、馴染みの肉屋で、そんな重たい話を聞かなければならないのか。聞かされたところでいったいなにをどうしろと。それ以前に、たまたまそう見えただけで、勘違いなのではないか。

みらい：

「そうだったら……いいんですけどね」

みらい：

「ホテルから出てきて、たまたま……って、あるんですかね」

王手がかかった。

みらい：

「駅前の、そういうホテルじゃないんですけど……水比INNから、水比高校の制服を着た子と」

妙に具体的だった。

みらい：

「……すみません、変なこと話しちゃって。仕事に戻りますね」

みらいが厨房に戻っていくの確認した後、夫の高木龍二について確認する。三年前に結婚するまで、悪い噂どころか浮いた話の一つもなかった堅物だったはずだ。だが、そういう真面目な人間ほど、結婚してから女遊びを覚えるとも言う。今のところ、みらいの話だけでは黒とも白とも言い難いところだ。馴染みの店がぎくしゃくするのは見えていて忍びない。そういう人情が無いわけでもないし、こう言っては不謹慎かもしれないが。……単純に、対岸の火事として見るのなら、野次馬気分で面白そうな気もしなくはない。

今回のシナリオでは脅威の闇を【浮気の疑い】と定義する。

狂騒フェイズでは調査を進めることで【浮気の疑い】を減少させていくことになる。

調査が進めば疑いが晴れ、身の潔白を証明することになるかもしれないし、逆に浮気が確定するかもしれない。

[次のページへ進む。](#)

みらいの話から調べられそうなことは、以下の二つだろう。

調査項目1【水比INN】指定特技：権力

調査項目2【水比高校】指定特技：交霊術

ホテルに対して事実確認をすればハッキリすることもあるだろう。  
だが、客として来ていたのならばそうそう簡単に話を聞けるとも思えない。  
直接、ホテル側から事情を聞くには、相応の権力が必要になるだろう。

二つ目の水比高校はその女子高生を探し出し、直接話を聞けばいい。  
だが、みらいの話だけではその女子高生が誰なのか、特定が難しい。  
そもそも水比高校は進学校で市内では有名な公立高校で、生徒の素行も悪くないと聞いている。  
直接探し出すのならばそれこそ交霊術じみた直観か、それに代わる超常的な力が必要だろう。

もし、このままこの件を調べるなら、次のページへ。

もし、興味がわかなければここでシナリオを終了。高木夫妻はしめやかに離婚する。



【次のページ】

君達が思惑はそれぞれに、みらいの話を調べようかと決めたところだった。

みらい：

「はい、おまちどうさま」

サラダとライスを持ってきてくれた。

……まだ何も注文していないはずなのに。これは重症だ。

みらい：

「……あ、あ！ す、すすす、すみません！ なんだろう、うっかりしちゃって……えと、何にします？」

慌てで伝票を持ってくるみらいに、調べてみることを伝えると。

みらい：

「え……！？ そ、そんな、そんなすみません、変なこと話してしまっ……!?」

みらい：

「すみません……ありがとうございます」

みらい：

「じゃあ、ご注文、お聞きしますね。今日は何にしますか？」

ところで、サラダとライスは確定なのだろうか。

[準備ができたら→13ページへ行く。](#)



## 【狂騒フェイズ1 サイクル目】

高木龍二を調べることにした君達。

一人一人がそれぞれバラバラに調べていってもいいが、それではみらいの気持ちも休まらないだろう。

1 サイクルごとにTAKAGIに集まり、結果を報告することにした。

こちらの思惑がどうであれ、1 サイクルごとにみらいと顔を合わせるわけだ。

その時、みらいのテンション次第ではこちらの気分も落ち込み、闇に誘われる可能性もある。

防御判定をすることでみらいのケアに回れば、多少、被害も抑えられるかもしれない。

日常なり拠所なりで心の平穏を求めつつ、適度な休憩も必要だろう。

### 1. 調査判定

今、調査できるのはこの二つだ。

#### 調査項目1 【水比INN】 指定特技：権力

ホテルに対して事実確認をするため、相応の権力が必要になるだろう。

[この項目を調べ、判定に成功したならば→39ページへ行く。](#)

#### 調査項目2 水比高校 指定特技：交霊術

みらいの話だけでは女子高生を特定できないだろう。

霊的な術か、それに代わる超常的な力が必要だ。

[この項目を調べ、判定に成功したならば→47ページへ行く。](#)

### 2. 防御判定

疑心暗鬼になってしまっているみらいのケアに回る。

もし、時間の関係で尺を取れない場合は省略してもよい。

[防御判定をするならば→50ページへ行く](#)

### 3. 日常・拠所判定

ご自由にどうぞ。

[1 サイクル目、すべての行動を終えたら、→20ページへ行く。](#)

## 【狂騒フェイズ2サイクル目】

2サイクル目もやることは変わらない。  
しかし、みらいの様子からすると、相当なストレスを溜めているように思える。  
調査を進めるのであれば、急いだ方がいいかもしれない。

### 1. 調査判定

1サイクル目で調査していないものがあれば、1サイクル目と同様に行うこと。

#### 調査項目 1

[この項目を調べ、判定に成功したならば→39ページへ行く。](#)

#### 調査項目 2

[この項目を調べ、判定に成功したならば→47ページへ行く。](#)

【電話番号】【書類の写し】を両方持っていれば、以下の項目を調べることができる。

#### 調査項目 3

[この項目を調べるならば、→27ページへ行く。](#)

### 2. 防御判定

疑心暗鬼になってしまっているみらいのケアに回る。  
もし、時間の関係で尺を取れない場合は省略してもよい。

[防御判定をするならば→50ページへ行く](#)

### 3. 日常・拠所判定

ご自由にどうぞ。

[すべての行動を終えたら、→19ページへ行く。](#)

[もしすべての行動を終えて、【録音】を持っていたなら→32ページへ行く。](#)

## 【狂騒フェイズ3サイクル目】

3サイクル目もやることは変わらない。  
情報をまだ調べ切っていないが、どこまで調べるか。

### 1. 調査判定

2サイクル目までに調査していないものがあれば、2サイクル目までと同様に行うこと。

#### 調査項目1

[この項目を調べ、判定に成功したならば→39ページへ行く。](#)

#### 調査項目2

[この項目を調べ、判定に成功したならば→47ページへ行く。](#)

【電話番号】【書類の写し】を両方持っていれば、以下の項目を調べることができる。

#### 調査項目3

[この項目を調べるならば、→27ページへ行く。](#)

### 2. 防御判定

疑心暗鬼になってしまっているみらいのケアに回る。  
もし、時間の関係で尺を取れない場合は省略してもよい。

[防御判定をするならば→50ページへ行く](#)

### 3. 日常・拠所判定

ご自由にどうぞ。

[すべての行動を終えたら、→18ページへ行く。](#)

[すべての行動を終えて【録音】を持っていたなら→17ページへ行く。](#)

### 【狂騒フェイズ3 サイクル目特別編】

もはやことここに至っては、この現場から離れる意味が無いだろう。

龍二とみらいがバチバチとして……バチバチ？

みらい：

「もう好きになさればいいじゃないですか！ お一人で！」

龍二：

「ちが、そうじゃない、そうじゃあないんだって……」

訂正。

一方的な試合展開だった。

とはいえ、今できることと言えば、こちらに飛び火しないよう適度に仲裁に入るか。

そうでなければこっそり席を外して外の空気を吸ってくるか、そのぐらいしかやりようがないだろう。

できる行動は以下の二つだ。

#### 1. 防御判定

演出は省略する。

とにかく、飛び火しないよう必死で防御を固めよう。

演出とかしている場合ではない。

#### 2. 日常・抛所判定

ここの空気はよくない。

外の空気を吸って、光を補給しなければ。

[すべての行動を終えたら、→17ページへ行く。](#)



### 【脅威の行動：3 サイクル目】

一触即発の空気が漂う中、口火を切ったのはみらいだった。

みらい：

「もう、実家に帰らせてもらいます！」

そういつてみらいは部屋をばたばたと飛び出して、自分の部屋へと戻っていく。

龍二：

「……………」

龍二は力なくうなだれ、誰に聞かせるでもなく呟いた。

龍二：

「……口説かれただけなんだ、本当に、本当に、何もしてないんだ……」

龍二：

「私が一体、何をしたというんだ……」

いたたまれない空気が君達を闇に誘う。

1 サイクル目、2 サイクル目に選んだ人以外を対象に誘いを放つ。

一通り処理を終えたら、【離婚させない】か【離婚させる】か。選択し、決定すること。

【離婚させない】のであれば、→35ページへ行く。

【離婚させる】のであれば、→36ページへ行く。

### 【脅威の行動：3サイクル目】

結局、龍二が浮気をしているのかどうか、定かにはならなかった。

みらい：

「……………もう、私たち、ダメなんですかね」

結論は出なかったがやたら重たい結論が出そうになっている。

どんよりとしたみらいの雰囲気が君たちを闇に誘う。

1 サイクル目、2 サイクル目に選んだ人以外を対象に誘いを放つ。

一通り処理を終えたら、【離婚させない】か【離婚させる】か。選択し、決定すること。

龍二の疑いは、疑いのままではっきりとはしない。

しかし、みらいにとって大きな負担となっているのも確かだろう。

あえて、どちらを勧めるのかと言えば、どちらだろうか。

【離婚させない】のであれば、→33ページへ。

【離婚させる】のであれば、→34ページへ。

### 【脅威の行動：2サイクル目】

君達が一通り行動を終えてTAKAGIに戻ると、みらいがお茶を入れて待っていてくれた。

みらい：

「すみません、私のために面倒をかけてしまって……」

けっして催促こそしないが、結果が気になるのだろう。

そわそわと君達の様子を気にしている。

新たに【書類の写し】と【電話番号】を手に入れたなら→28ページへ行く。

新たに【書類の写し】を手に入れたなら→29ページへ行く。

新たに【電話番号】を手に入れたなら→30ページへ行く。

何も持っていなければ→31ページへ行く。

**【脅威の行動：1 サイクル目】**

君達が一通り行動を終えてTAKAGIに戻ると、みらいがお茶を入れて待っていてくれた。

みらい：

「すみません、私のために面倒をかけてしまって……」

けっして催促こそしないが、結果が気になるのだろう。  
そわそわと君達の様子を気にしている。

【書類の写し】と【電話番号】を持っているなら→21ページへ行く。

【書類の写し】だけ持っているなら→22ページへ行く。

【電話番号】だけを持っているなら→23ページへ行く。

何も持っていなければ→24ページへ行く。

**【書類の写し】と【電話番号】を持っている。**

君達は調査で集めた証拠をみらいに確認させる。

書類の写しからホテルへはいかがわしい目的ではないことを説明した。

また電話番号を渡されたことから、女子高生とも深い仲ではないと推測した。

みらい：

「……………」

しかし、明るい材料のはずなのに、みらいの顔色は暗い。

みらい：

「仕事……そう、だったんですか。そう、仕事で……そうですか」

みらい：

「……そういう大事な話も、主人はしてくれないんですね」

電話番号に至っては、むす、つとしたままだ。

みらい：

「……………そうですか。そうなんですか」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

ランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→25ページへ行く](#)

### 【書類の写し】だけ持っている

君達は調査で集めた証拠をみらいに確認させる。

書類の写しからホテルへはいかがわしい目的ではないことを説明した。

みらい：

「……………」

しかし、明るい材料のはずなのに、みらいの顔色は暗い。

みらい：

「仕事……そう、だったんですか。そう、仕事で……そうですか」

みらい：

「……そういう大事な話も、主人はしてくれないんですね」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

ランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→25ページへ行く](#)

**【電話番号】**だけ持っている。

君達は調査で集めた証拠をみらいに確認させる。

電話番号を渡されたことから、女子高生とも深い仲ではないと推測した。

電話番号の件を伝えると、むすっとしたままだ。

みらい：

「……………そうですか。そうなんですか」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

ランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→25ページへ行く](#)

### 【何もない】

このサイクルは準備に充てたため、新たな情報は特に出していない。  
そのことをみらいに伝えると、君達に礼を言った。

みらい：

「わざわざそこまでしてくださって、本当にありがとうございます」

みらい：

「そんな、私も詳しく見ているわけではありませんし、大変だと思いますから」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。  
ランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→25ページへ行く](#)



## 【1サイクル目終了】

どんよりとした空気を纏ったまま、みらいはもそもそとこんなことを呟く。

みらい：

「……明日、お店も定休日、主人も家に居るんですけど」

みらい：

「どうしたら……いいですかね」

【書類の写し】と【電話番号】の両方を持っていれば→26ページへ行った後、

→19ページへ行く。

どちらかが欠けていたならば、直接、19ページへ行く。

【書類の写し】と【電話番号】の両方を持っている

ここで調査項目が追加される。

調査項目 3 【高木龍二】 指定特技：目線

事実確認は終わった。あとは本人と直談判で決着を付けなければなるまい。

[1 サイクル目にこの情報を開いたとき、19 ページに進むこと。](#)



### 調査項目 3 【高木龍二】 指定特技：目線

事実確認は終わった。あとは本人と直談判で決着を付けなければなるまい。

この項目を調べ、判定に成功したならば→49 ページへ行く。

判定に失敗したならば、

2 サイクル目なら→14 ページへ戻る。

3 サイクル目なら→15 ページへ戻る。



新たに【書類の写し】と【電話番号】を手に入れた。

君達は調査で集めた証拠をみらいに確認させる。

書類の写しからホテルへはいかがわしい目的ではないことを説明した。

また電話番号を渡されたことから、女子高生とも深い仲ではないと推測した。

みらい：

「……………」

しかし、明るい材料のはずなのに、みらいの顔色は暗い。

みらい：

「仕事……そう、だったんですか。そう、仕事で……そうですか」

みらい：

「……そういう大事な話も、主人はしてくれないんですね」

電話番号に至っては、むす、つとしたままだ。

みらい：

「……………そうですか。そうなんですか」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

1 サイクル目に選んだ人以外のランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→15ページへ行く。](#)

新たに【書類の写し】を手に入れた。

君達は調査で集めた証拠をみらいに確認させる。

書類の写しからホテルへはいかがわしい目的ではないことを説明した。

みらい：

「……………」

しかし、明るい材料のはずなのに、みらいの顔色は暗い。

みらい：

「仕事……そう、だったんですか。そう、仕事で……そうですか」

みらい：

「……そういう大事な話も、主人はしてくれないんですね」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

1 サイクル目に選んだ人以外のランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→15ページへ行く。](#)

新たに【電話番号】を手に入れた

君達は調査で集めた証拠をみらいに確認させる。

電話番号を渡されたことから、女子高生とも深い仲ではないと推測した。

電話番号の件を伝えると、むすっとしたままだ。

みらい：

「……………そうですか。そうなんですか」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

1 サイクル目に選んだ人以外のランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→15ページへ行く。](#)

### 【何もない】

このサイクルは準備に充てたため、新たな情報は特に出していない。  
そのことをみらいに伝えると、君達に礼を言った。

みらい：

「わざわざそこまでしてくださって、本当にありがとうございます」

みらい：

「そんな、私も詳しく見ているわけではありませんし、大変だと思いますから」

みらいの顔色は暗く、店内を陰鬱な空気が支配する。

1 サイクル目に選んだ人以外のランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→15ページへ行く。](#)

【録音】を既に持っている。

音も立てずに登場したみらいは、妙に落ち着いた雰囲気、笑みを浮かべた。

みらい：

「ええ、わかりました。もう、全部わかりました」

龍二：

「いや、あの、待ってくれ、違うんだ、違うんだ、何も、何もしてないんだ」

みらい：

「『まだ』ですよ？ 『これから』なんですよ？」

体格差もあれば、声の大きさもまるで違う2人。  
だというのに、体格も声も小さなみらいが龍二を圧倒していた。

龍二：

「ちがっ……！ ただ、ほら！ 取引先の娘さんだから、あんまり冷たくもできなかつただけなんだ！」

みらい：

「冷たくしなくても断れたでしょう！？」

龍二：

「それは、いや……でも、ほら……」

いたたまれない空気が君達を闇に誘う。  
1 サイクル目に選んだ人以外のランダムな対象に誘いを放つ。

[一通り処理を終えたら、→16ページへ行く。](#)

龍二はできれば離婚したくないと考えているし、みらいは愛想が尽きたようなことを言っている。  
さて、どちらの側につくべきか。  
決戦までの間に以下の二つ相談し、決定しておくこと。

【離婚させない】か【離婚させる】か。決戦の直前まで決定し、選択をすること。



### 【離婚させない】

みらいにとって、負担になっているのは確かだろう。  
しかし、勘違いなのかどうかも分からないうちに、というのはどうだろう。

龍二：

「ただいま。……みらい？ みらい？」

みらい：

「……あ」

そんなとき、タイミング良くというべきか、タイミング悪くというべきか、龍二が帰ってきた。  
だがしかし、いい機会なのかもしれない。これは、みらいだけの問題ではないのだから。  
夫婦の問題なのだから、ここはひとつ、お互いに話し合ってもらった方がいいだろう。

みらい：

「……そう、ですかね。……うん。そうですね」

ひとまず納得したのか、みらいは玄関へと足を進め……。

みらい：

「……実家に帰らせてもらいます！」

龍二：

「えっ！？」

みらいはそれだけ言い放つと、バタバタと部屋へと戻ってしまった。  
さあ、いきなり雲行きが怪しくなった。

以降、このシナリオでは脅威の闇を【妻の怒り】と定義する。  
決戦で【妻の怒り】を0にしない限り、夫婦の危機は過ぎ去らない。  
もし、全員が「離婚しても仕方がないかなあ……」とあきらめたとき、和解は成立とする。  
その場合、龍二とみらいの和解は成立しない。ややこしい。

[決戦フェイズ→37ページへ行く。](#)

### 【離婚させる】

離婚させる、させないはともかくとして、やはり龍二の態度にも問題はある。  
疑われるような態度やコミュニケーションの不足があるのは確かだ。

みらい：

「……………」

みらい：

「すみません。皆さんにご迷惑をおかけして……私、しばらく実家に帰ろうと思うんです」

みらい：

「本当のところはどうなのか、わかりませんが……あの人にも、色々反省してもらいたいです」

みらい：

「結婚してからずっと、なんとなくで過ごしてきちゃいましたけど、いい機会かな、って」

みらい：

「少し、少しだけ……距離を取ろうかな、って」

たしかに、この夫婦には時間が必要なかもしれない。

龍二：

「ただいま。……みらい？ みらい？」

みらい：

「……あ」

そんなとき、タイミング良くというべきか、タイミング悪くというべきか、龍二が帰ってきた。  
みらいは玄関へと足を進め……。

みらい：

「……実家に帰らせてもらいます！」

龍二：

「えっ！？ み、みらい？ みらい、一体、なにが！？」

きっぱり言い放つと部屋へ戻っていくみらい。  
ただ、当然ながら龍二はこれでは納得しないだろう。

以降、このシナリオでは脅威の闇を【夫の狂乱】と定義する。  
決戦で【夫の狂乱】を0にしない限り、何かしらの事件が起きるかもしれない。  
もし、全員が「この大きな子供はだめだな……」とあきらめたとき、和解は成立とする。  
その場合、龍二とみらいの和解は成立せず、なあなあが続くだろう。

[決戦フェイズ→37ページへ行く。](#)

**【離婚させない】**

龍二：

「……………」

部屋に取り残された龍二は、君たちに相談する。

龍二：

「妻に、謝ろうと思うんだ」

龍二：

「その……浮気をしたつもりはないが、その、色々、ないがしろにしていたんじゃないかと思うんだ」

龍二：

「情けない話だが……その、手伝ってもらえないだろうか」

龍二が何をしたかと言えば、女子高生に鼻の下を伸ばした、程度だろう。

魔が差した、というほど何かをしたのかと言われれば、そうでもない。

結果がどうなるかはわからないが、謝る手伝いぐらいはしていいのかもしれない。

君達が了承の旨を伝えると、龍二は深々と頭を下げた。

龍二：

「……すまない。ありがとう」

以降、このシナリオでは脅威の闇を【妻の怒り】と定義する。

決戦で【妻の怒り】を0にしない限り、夫婦の危機は過ぎ去らない。

もし、全員が「離婚しても仕方がないかなあ……」とあきらめたとき、和解は成立とする。

その場合、龍二とみらいの和解は成立しない。ややこしい。

[決戦フェイズ→37ページへ行く。](#)

### 【離婚させる】

離婚させる、させないはともかくとして、やはり龍二の態度にも問題はある。  
女子高生と浮気をしてはいないのだろうが、もっと大人の対応をとるべきだっただろう。

みらい：

「……………」

みらいの部屋からはドタバタと荷造りする音が聞こえる。  
どうやら実家に帰るといのは本気らしい。

みらい：

「すみません。皆さんにご迷惑をおかけして……」

みらい：

「あの場では、ああ言いましたが……あの人には反省してもらいたいです」

ドアの向こうから聞こえる声は思ったよりも冷静だった。

みらい：

「結婚してからずっと、なんとなくで過ごしてきちゃいましたけど、いい機会かな、って」

みらい：

「少し、少しだけ……距離を取ろうかな、って」

たしかに、この夫婦には時間が必要なかもしれない。  
ただ、龍二のあの様子ではそのまま送り出してくれるということはないだろう。

以降、このシナリオでは脅威の闇を【夫の狂乱】と定義する。  
決戦で【夫の狂乱】を0にしない限り、何かしらの事件が起きるかもしれない。  
もし、全員が「この大きな子供はだめだな……」とあきらめたとき、和解は成立とする。  
その場合、龍二とみらいの和解は成立せず、なあなあが続くだろう。

[決戦フェイズ→37ページへ行く。](#)

## 【決戦フェイズ】

みらいの部屋までやってきた龍二は、動転した様子でドアを叩く。

龍二：

「みらい？ みらい？ すまない、話だけでも聞いてくれないか！？」

みらい：

「イヤです！」

龍二もみらいも冷静とは言い難い。

君達の説得や介入が無ければ、収まるものも収まらないだろう。

決戦の開始だ。

このシナリオでは攻撃判定は説得や介入として処理をする。

演出などは表現が難しければ省略しても構わないとする。

脅威が再起に成功したら

[1回目→4 1 ページへ行く。](#)

[2回目→4 3 ページへ行く。](#)

[3回目→4 5 ページへ行く。](#)

[4回目→4 8 ページへ行く。](#)

[5回目→5 2 ページへ行く。](#)

[6回目→5 5 ページへ行く。](#)

脅威の行動

[1回目→4 6 ページへ行く。](#)

[2回目→5 1 ページへ行く。](#)

[3回目→5 7 ページへ行く。](#)

[4回目→5 4 ページへ行く。](#)

決戦終了

[再起に失敗したら→4 9 ページへ行く。](#)

[和解をするのであれば→5 6 ページへ行く。](#)

## 【1. 商店街のコロッケ】

この辺りにはTAKAGI以外に肉屋がもう一店ある。

商店街の老舗は肉屋一本で、コロッケやメンチカツなども売っているのだが……。

みらい：

「あそこのコロッケ、美味しいですよね！」

みらい：

「お芋のポクポク感が美味しくて、たまにこっそり買ってるんですよ」

みらい：

「……うちの人に見られると、その日一日むっとしてるんですよ？」

困った人ですよ、と言っているのは、これはノロケなのだろうか。

[1 サイクル目なら→13ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15ページへ行く。](#)

## 調査項目1 【水比INN】 指定特技：権力

ホテルに対して事実確認をするため、相応の権力が必要になるだろう。  
ホテルの支配人に話を通すと、確認の時間を空けてくれた。

支配人：

「はい、高木様……ですか？」

名前だけでは思い出せなかったのか、龍二の風貌を伝えたところで「ああ」と一声つく。

支配人：

「高木様でしたら、先日、食堂の契約のためにお越しいただきましたので、その時のことかと」  
「お客様としてみえられたことはありませんね……地元ですから、当たり前と言えば当たり前なんです」

その時に、連れががいなかったか。単刀直入に尋ねると、覚えがないのかまた首を傾げた。  
支配人の様子を見る限り、よほど印象に残らなかったのだろう。  
怪しい素振りではなかったのか、みらいの勘違いだったのではないか、と考え始めたころ。

支配人：

「……ただ、そうですね」

支配人：

「そのとき、オーナーの娘さんもたまたま同席していましたね。日高かなえさんと言いまして」

支配人：

「水比高校に通っていますよ。当たり前ですが、当然、いかがわしい話などは特には……」

龍二との関係はどうなのか、と聞くと、支配人は困惑した様子で付け加える。

支配人：

「どんな関係、と言われましても……たまたまその時、初対面でしたので、ご紹介しただけですが」

支配人：

「肉を卸してくださる、高木様です、とだけ。お疑いでしたら、取引の写しがありますのでお持ちください」

君は【書類の写し】と日高かなえについての情報を手に入れる。  
この情報が公開されたあと、調査項目2【水比高校】の指定特技は無くなる。  
もはや探す必要は無く、直接本人に当たればそれでいいだろう。

[1 サイクル目なら→13ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15ページへ行く。](#)



## 【6. ステーキハウスの話】

いつも店では笑顔を浮かべているみらいだ。

それならば、ステーキハウスの話なら気もまぎれるかもしれない。

みらい：

「……お店ですか？ ふふ、けっこう私、好き勝手やっちゃってますよ？」

みらい：

「うちの人はやっぱり専門家ですから、外でいろいろ営業とかしてもらってて……」

みらい：

「でも、ステーキの腕なら、今は私の方がずっとうまいんですよ？」

なんなら試してみますか？ と悪戯っぽく言ってくれる。

いつも食べているので、腕前については既によく知っているのだが。

[1サイクル目なら→13ページへ行く。](#)

[2サイクル目なら→14ページへ行く。](#)

[3サイクル目なら→15ページへ行く。](#)



**【再起1回目】**

一瞬、2人は冷静さを取り戻したかのように見えたが、先にみらいが口を開いた。

みらい：

「休みの日だって家の掃除もしないし！ ゴミだしだって私がやってるし！」

龍二：

「家の物勝手に触ると怒るだろ！？ いや、違うんだ、言ってくればやる、やるから！」

みらい：

「掃除機を元の場所に戻してくれないし！ 何回言っても別のところに置くし！」

龍二：

「や、やろうとは思ってるんだ、思ってるんだよ、ホントなんだよ……！」

まだまだ収まりそうにはない。

[→37ページへ戻る。](#)



### 調査項目 3 【高木龍二】 指定特技：目線

事実確認は終わった。あとは本人と直談判で決着を付けなければなるまい。  
高木龍二は君たちに問い詰められると、観念するしたように答える。

龍二：

「彼女からアプローチを受けてるのは、その……事実だ」

龍二：

「その……まあ……なんだ」

しどろもどろに汗をぬぐいながら、龍二は君たちに真剣な目を向ける。

龍二：

「……女子高生とワンチャンあるなら、というのがなかったとはいわない」

龍二：

「いや、まだ、手を出してない、手を出してないし、離婚するつもりもない、ないんだ」

龍二：

「ただほら、ひと夏のアバンチュールで、ほら、鼻の下が伸びたというか……」

龍二：

「それにほら、取引先の娘さんで、ほら。あんまりほら、無下にもできない、そういうあれがホラ」

龍二：

「ホラ、取引先の娘さんで、ホラ！ ホラ！ なぁ！？ ……わ、わかるだろ……？」

念のため、【録音】を取っておこう、とレコーダーを切ったその時だった。【録音】を手に入れる。

そこまで言ったところで、君たちの背後から、みらいが現れた。

もし、3サイクル目にこの情報を開いた場合、みらいの手には包丁が握られている。

PC 3人以外でプレイしていた場合、情報イベント『貴様、見ているな！？』が発動。

即座にいたたまれない空気が君を闇へ誘う。

処理を一通り終えた後、

[1 サイクル目なら→13 ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14 ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→16 ページへ行く。](#)



**【再起2回目】**

お互い、納得したような雰囲気を見せたように思えたが、まだ火種はくすぶっていた。

みらい：

「……よそのコロッケ食べてたら怒るし……！」

龍二：

「そ、そのぐらい、それ……え！？ それ怒ったらダメなの！？」

龍二：

「違うんだよ！？ やっぱり俺のが一番だって思ってもらいたって、そういう……解ってくれよ！？」

この夫婦はなんというか、絶望的に今まで会話が足りていなかったのではないだろうか。  
たまりにたまった鬱憤は、まだ晴れそうにない。

[→37ページへ戻る。](#)



#### 【4. お茶を淹れる】

気分が高ぶったときには温かい物がいいという。

自分の店なのだから、客が用意するのもどうかと思うが、今ぐらいいいだろう。

みらい：

「あ。すいません、ありがとうございます……」

みらい：

「ふふ。人にお茶を淹れてもらうのって、なんかいいですね」

みらい：

「……こう見えても私、結構モテるんですよ？ お客さんからもお茶に誘われたりとか」

まだまだ女子高生には負けてません、と胸を張る姿はどこか子供っぽかった。

[1 サイクル目なら→13ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15ページへ行く。](#)

**【再起3回目】**

溜めこんだものを吐き出して、それが呼び水になったのか、まだまだ留まりそうにない。

みらい：

「……私だって、お店に立っていると、いろいろ誘われたりするのに……」

龍二：

「はあ！？ え、ちょ、え！？ ……え！？ ホントに！？ うそだろ！？」

……むしろ龍二はそういうことが無いと、本気で思っていたのだろうか。  
思ったよりも根が深そうだ。

[→37ページへ戻る。](#)



## 【脅威の行動：1回目】

君たちの説得が続く中、みらいが金切り声をあげる。

みらい：

「だって！ いつもいつも店のことを私に任せてばかりで何にもしてくれないッ！」

《超音波》で全体攻撃を行う。連続判定は行わない。  
一通り処理を終えた後、龍二はぼそぼそと言訳をする。

龍二：

「それはその……悪かったと思ってる！ その、みらいがいるから、私が営業に出られるようになって……」

龍二：

「その……つい、頼りっきりになってしまっ……」

決戦は2サイクル目に移る。

[→37ページへ戻る。](#)



## 調査項目2 水比高校 指定特技：交霊術

みらいの話だけでは女子高生を特定できないだろう。

霊的な術か、それに代わる超常的な力が必要だ。

どのような手段を使ったのか。

みらいの証言から、龍二と一緒にいた女子高生は日高かなえという名前だと分かった。

水比INNオーナーの娘であり、その日はたまたまホテルに来ていたらしい。

だが、龍二との関係はどうか。直接本人に聞くことにした。

かなえ：

「え？ 高田さん……ですか？」

かなえ：

「その、はい。父のホテルで、お仕事で見えて、その時にお会い……しました」

なぜ、頬を赤らめるのか。

龍二は本当に何かしでかしたのか。

かなえ：

「いえ、そういうことは全然っ！ まだっ！」

まだ、ときた。

かなえ：

「私の方が、一目ぼれしてしまって」

一目ぼれ。

かなえ：

「あの！ 高木さんのお知り合いでしたら、これ、私の番号なので、伝えて貰えたら……」

伝えるかどうかは別として、【電話番号】を手に入れる。

この情報が公開された後、調査項目1【水比INN】の指定特技が無くなる。

これでまだ、今のところ、龍二は彼女の電話番号すら知らない、という証拠にはなるだろう。

[1 サイクル目なら→13ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15ページへ行く。](#)



【再起4回目】

みらい：

「お店のことは私にまかせっきりなのに、仕事のこと話してくれないし……！」

龍二：

「それは、店のこと以外で負担をかけたくなくて、秘密にしたわけじゃあ……」

みらい：

「女子高生のことも仕事だから黙ってたんですか」

龍二：

「何もしてないんだ！ 本当なんだよ！」

龍二は龍二で、必死過ぎて逆に疑わしく見えてしまう。

[→37ページへ戻る。](#)





## 【再起失敗・決戦終了】

みらい：

「……………」

龍二が落ち着きを取り戻したころ、みらいの部屋のドアがギィ、と開き……。

みらい：

「……………じゃあ、私も男の人と遊びに行っても、いいんですね？」

龍二：

「それは……勘弁してくれ」

龍二が白旗を上げ、決戦は終了した。

PCはそれぞれ回帰フェイズに入り、判定を行うこと。

もし、闇落ちした場合は日常型のパターンにのっとり、軽めに処理をすること。

例えば、力が暴走するようなものならば、ギンギンして夜が眠れなくなる。

例えば、敵に見つかるようなものならば、一時的に町内会でファンクラブが作られる。

帰還型シナリオはそれらを解決する日常型シナリオを推奨する。

決戦前、【離婚させる】を選んでいたら→61ページへ行く。

決戦前、【離婚させない】を選んでいたら→58ページへ行く。



## 【防御判定】

みらいの気分を和ませるような、気をそらせるような話題を以下の中から選ぶ。  
特技の例を参考に選んでもいいし、省略してもよい。

1. 商店街のコロッケ《護衛》《装備》《代替》

[→38ページへ行く。](#)

2. 家の話をする《擬態》《隠れる》《遮蔽》

[→60ページへ行く。](#)

3. 龍二の思い出話を振る《読み》《体捌》《無刀》

[→62ページへ行く。](#)

4. お茶を淹れる《憑依》《防壁》《召喚》

[→44ページへ行く。](#)

5. 龍二の良いところは？《超軟体》《超剛体》《超脚力》

[→53ページへ行く。](#)

6. ステーキハウスの話《皮》《鱗》《翼》

[→40ページへ行く。](#)

## 【脅威の行動：2回目】

龍二：

「そうだ、みらい！　せめてドアを開けてくれ！」

すると、ドアが《超腕力》で叩かれた。

《超腕力》から全体攻撃が全員を襲う。連続判定は行わない。  
一通り処理を終えた後……。

龍二：

「……………」

龍二が一步引き、決戦は3サイクル目に移る。

[→37ページへ戻る。](#)



【再起5回目】

みらい：

「……最近はぜんぜん構ってくれないし」

龍二：

「……………その、それは、その」

ちらちらとこちらを見ないでほしい。

龍二：

「本当に悪い、とは、思う、けど、も……その……」

あと照れないでほしい。

[→37ページへ戻る。](#)



### 【5. 龍二の良いところは？】

悪いことばかり考えていても仕方がない。

龍二のいいところや魅力でもないのか、と尋ねてみると、みらいは難しい顔をした。

みらい：

「体格ですよね」

もうちょっと何か無いのだろうか。

みらい：

「見た目はでも大事ですよ？ あの人、意外と小心者で……見た目でだいぶ助けられていますから」

みらい：

「……まあ、だからモテちゃうのかもしれないんですけど」

みらいはむすーっと頬を膨らませて拗ねてしまった。

[1 サイクル目なら→13ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15ページへ行く。](#)

## 【脅威の行動：4回目】

ひび割れたドアの隙間から、何やら視線を感じる。

《目線》から全体攻撃が全員を襲う。連続判定は行わない。

決戦は5サイクル目に移る。

脅威の行動は5回目以降、以下の特技からランダムに決定すること。

- 1 《交霊術》
- 2 《目線》
- 3 《権力》
- 4 《超音波》
- 5 《破壊》
- 6 《超腕力》

[→37ページへ戻る。](#)



【再起6回目】

みらい：  
「……バカ」

龍二：  
「……悪い」

そろそろ帰っていいですか？

[→37ページへ戻る。](#)



## 【和解・決戦終了】

みらい：

「……………」

君達の限界が来たことを察したのか、みらいの部屋のドアがギィ、と開き……。

みらい：

「…………じゃあ、私も男の人と遊びに行っても、いいんですね？」

龍二：

「それは……勘弁してくれ」

龍二が白旗を上げ、決戦は終了した。

PCはそれぞれ回帰フェイズに入り、判定を行うこと。

もし、間落ちした場合は日常型のパターンにのっとり、軽めに処理をすること。

例えば、力が暴走するようなものならば、ギンギンして夜が眠れなくなる。

例えば、敵に見つかるようなものならば、一時的に町内会でファンクラブが作られる。

帰還型シナリオはそれらを解決する日常型シナリオを推奨する。

[決戦前、【離婚させる】を選んでいたら→58ページへ行く。](#)

[決戦前、【離婚させない】を選んでいたら→61ページへ行く。](#)





## 【脅威の行動：3回目】

——メキリッ

龍二：

「……………」

妙な音に振り向くと、ドアが《破壊》されていた。  
《破壊》から全体攻撃が全員を襲う。連続判定は行わない。

決戦は4サイクル目に移る。

[→37ページへ戻る。](#)



## 【エンディングA】

——ある日のTAKAGIの日常。

みらい：

「はい、いらっしゃいませー」

以前までなら店主の妻、みらいの声ばかりが響いていた店内に、今日は別の声が聞こえた。

龍二：

「はい、いらっしゃい」

今までは外での仕事の多かった龍二も、みらいと並んで店を切り盛りすることが多くなっていた。ただ、変化はそれだけではないようで……

龍二：

「……なあ、みらい」

みらい：

「はい？」

龍二：

「あの女子高生、可愛くないか？」

みらい：

「……………」メシリっ

龍二：

「ぐぬお!？」

そんなコントが繰り返されているところに、ちょうど君たちがやってくる。

龍二：

「あ、ああ、いらっしゃい。いててて……」

みらい：

「あら、すみません。お見苦しいところを」

君達から一言ずつ苦言や呆れたようなコメントを貰った後、龍二は真面目くさって言う。

龍二：

「……よく考えたんだ。俺がもう、女子高生にトキメクのはもう、しょうがないんだな、って」

龍二：

「だから、そういうのはもう、隠さずに言った方がいい、ってお互い話し合っちな」

みらい：

「……まあ、よく考えたら私も引く手あまたなわけですからね」

みらい：

「ええ。そっちがその気なら、こっちもそれを言えばいいかな、って」

[次のページへ](#)

2人とも笑みを浮かべているが、からりとした龍二と比べ、みらいの眼は笑っていないように見える。

龍二：

「俺も、へんに遠慮しすぎたりしてたんだと思うよ。……まあ、うん、隠し事してるよりかは、気は楽だ」

龍二：

「こういう機会を貰えのは、本当に感謝してるよ。みなさん、ありがとうございました」

みらい：

「あ、それじゃあ……」

深々と頭を下げる龍二に、ポン、とみらいが手を打った。

みらい：

「みなさんにはご迷惑をおかけしましたし……今日は主人のおごりということで。ね？」

龍二：

「え」

龍二：

「なあ、みらい。……これ、経費であげていいか？」

みらい：

「ダメです♪」

紆余曲折はあったが、TAKAGIはなんだかんだで、上手く回っているようだった。

シナリオ『三年目の浮気』完



## 【2. 家の話をする】

店にいと店の話ばかりになってしまうし、どうしても龍二の話になってしまう。それならいっそ、休みの日はどうしているのかを聞いてみると。

みらい：

「この前は……あ、久しぶりにおうちの大掃除したんですよ」

みらい：

「なかなかお店も忙しくて、まとめてやる機会ってなくて」

みらい：

「……あの人、そういうのも手伝わないんですよ？」

と、そのまま普段の龍二に対する愚痴が色々と始まった。これも一つのガス抜きになっているのかもしれない。

[1 サイクル目なら→13 ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14 ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15 ページへ行く。](#)

## 【エンディングB】

——ある日のTAKAGIの日常。

龍二：

「はい、いらっしゃい」

以前までなら店主の妻、みらいの声ばかりが響いていた店内に、今日は別の声が聞こえた。

龍二：

「……ハハ、なんとかかんとかやっていますよ」

苦笑いを浮かべているが、その表情はけして暗くはなかった。

龍二：

「今、妻とは別居中ですけど……まあ、ね。うん」

龍二：

「離婚されなかつただけ良かったんじゃないかって、思っていますよ」

龍二：

「……前まで一人で店を回してたはずなんですけど、こうして思うと、妻のありがたみとか、忘れてましたね」

うんうん、と1人頷いて、自分に言い聞かせるように。

龍二：

「もっと……いろいろ、話しておけばよかったな……」

と、そんなとき、君たちの携帯にメールが届いた。

みらい：

『あの人、どうしてですか？』

あの一件以来、実家に帰ったみらいだが、龍二には内緒でちょくちょく様子を伺うメールが来ている。仕事はできているか、やつれていないか、その内容は心配するものがほとんど。そんなに心配なら家に戻ればいいのか、と思うのだが。

みらい：

『もう少し、反省させておいてください』

とのこと。  
以前のように1人鬱々と悩んでいたころと比べて、吹っ切れた様子にも見える。

龍二：

「あの、なにか？」

とはいえ、もうこの夫婦に君たちが何かする必要は、もう無さそうだ。

シナリオ『三年目の浮気』完

### 【3. 龍二の思い出話を振る】

今でこそ疑心暗鬼になっているが、結婚までしたのだ。  
龍二にもいいところやいい思い出の一つや二つはあるのではないか。

みらい：

「結婚したときはそれはもう、頼りがいがありましたよー」

みらい：

「それで、お店も一緒にやるようになって、だんだん頼ってくれるようになって……」

みらい：

「……もうちょっと、こっちのこともやって欲しいんですけどね？」

言いながらも、店を切り盛りするのも嫌いではないのか、口調は軽いように思う。

[1 サイクル目なら→13 ページへ行く。](#)

[2 サイクル目なら→14 ページへ行く。](#)

[3 サイクル目なら→15 ページへ行く。](#)